

二条中学校便り

第 3 号

平成 18 年 5 月 1 2 日

京都市立二条中学校

憲法月間5月～一人ひとりが守り続けたいものは？

さわやかな季節になりました。昼休みのグラウンドからは元気溢れる生徒の歓声が聞こえます。1年生は来週の花背宿泊体験学習に向けての取組の真っ最中。120人を超す大所帯で行う最初の大きな学年行事に期待が高まっています。以下は、3年生修学旅行の感想文からの抜粋を紹介します。裏面の憲法月間にちなんでの校長講話とも関連して、歴史を深く見つめ自分の問題としてとらえようとする姿勢がうかがえる文章です。

沖縄修学旅行感想文より

* 元ひめゆり部隊の語り部の方の話をお聞きして。胸が締め付けられるような悲惨な話だった。心に残ったのが友達竹原さんの死の場面だ。骨が見えるほどの傷というのは僕にはイメージしにくかったし、耳をふさぎなくなるぐらいだ。今僕の隣に座っているH君がそうだったらと想像してしまった。「竹原さんは『足はあるの?』と尋ね、『あるのなら立たせて』と私に懇願するのです」という言葉に僕は頭がガンガンし涙がでそうだった。友達が死んでいく。そんな苦しみはどこにあるのだろうか？

* 聞いていて楽しい話ではない。怖ろしい話だ。話されている方も苦しいと思う。それでも戦争を過去のこと、無関係のことと思う若者がいる限り、話さなければならないと思って生きておられると思う。昔だって一部の人の意見が通って他の人も巻き込まれたのだろうし、同じことが今起きてもおかしくないし、実際に起きている国もある。今の日本人は、判断できる知識や常識を最も必要とされる時期だ。

* 深さ7mの海でのシュノーケリング。水族館で見たことのある魚から見たことのない魚までもすごい数の魚がいる。雲から漏れた太陽の光が魚に反射してキラキラ光っている！珊瑚が見える！感動しているところにザッパーン～すさまじく塩辛い海水を大量に飲んでしまってむせた。

* サトウキビ畑で陽気なご夫婦に収穫の仕方を教えてもらった。周りについている葉を二股という道具でそぎ落とした後、鉛筆を削る感じで少しとがらせて生で食べると甘い！次に黒糖を煮詰める場所に移動した。110度～120度が最も適した温度だ。瞬く間にどろどろになり、白いつぶつぶが出来はじめて黒糖の成功だ。今までスポーツにしか興味なかった僕がこんな体験ができたことはとてもよかった。



4月29日(祝)爽やかな空の下での春体開会式を皮切りに各体育系部活の熱戦が繰り広げられました。男女バスケ・女子バレーなど初戦を突破し勝利を味わいましたが、あと一打、あと10cmが足りずに悔い涙を流した場面もありました。3年生を中心に最後の夏の大会目指して新たに毎日の練習を悔いのないものにしていきましょう。

人権講話～5月1日全校集会 学校長の話より

『日本国憲法』には、「**基本的人権の尊重**・**国民主権**・**平和主義**」という3つの大切な理念が基本原則として謳われています。その中でも、特に「**基本的人権の尊重**」は、日本の国の政治を行う上で最も尊重されなければならないものです。その意味で3つの基本原理の最初に掲げられています。本校ではこの「**基本的人権の尊重**」の理念を「**共生**」社会の実現を目指すという学校教育目標の表現の中に盛り込んでいます。わが国では従前より同和問題を初め、在日韓国・朝鮮人問題、アイヌ民族問題、女性問題、障害者問題などを学習することによって、「人権教育」が進められ、**人権学習の意義を学び、人権学習の歴史的経過について学び、人権問題を身近な問題としてとらえる** 学習をしてきました。

ここで一つのお話を紹介します。3年生は今年初めて航空機を使って沖縄への修学旅行に行きましたね。私も旅行前に『**世替わりにみる沖縄の歴史**』という本で事前学習しましたが、その本の中に「**甲子園の土**」という題でこのような文章が書かれていました。

1958年(昭和33年)の夏、夏の全国高校野球選手権大会に沖縄代表として首里高等学校が参加した。アメリカの占領下にあった沖縄からの参加ということで、高校野球関係者はもとより、全国の野球ファンも注目していた。首里高等学校野球部主将が選手を代表して選手宣誓をした。首里高等学校は福井県代表の敦賀高等学校と対戦し、3対1で惜敗した。『毎日新聞』はその時のことを「今年の大会は久しぶりに甘い涙で心を洗った。・・・日本人の頭に刻み込まれた沖縄のイメージが、全観衆の魂をゆさぶった。・・・ベンチに引き上げた首里の選手が、またグラウンドに駆け戻った。何をするかと見ていると、彼らはしゃがんで袋の中にグラウンドの土を詰め始めた。日本の土だ。ああ沖縄の少年たちよ。この土を持ち帰りたまえ。そしていつの日か諸君の郷土が日本の領土に復帰するまで、その土に一輪の花を植えてくれたまえ」と記している。ところが、選手たちが甲子園出場の記念に甲子園の土を持ち帰ろうとしたとき、防疫法(伝染病を防止するための法律)にふれるということで、その土は那覇港で廃棄処分になった。

この問題は本土のマスコミを通して全国民が知ることとなり、大きな批判が巻き起こった。ところが肝心の沖縄の反応は極めて鈍いものであった。占領政策にならされ、異民族支配という屈辱にさえ順応してしまった「自由という観念自体を喪失した」(伊波普猷)沖縄の人々の姿が見えてくるのである。

また一方では、「甲子園の土だ。日本の土だ。」と呼びかける『毎日新聞』の論調にも、4月28日を「屈辱の日」と位置づけた沖縄の人々の沈黙した怒りにむける視点はどこにもない。(1952年4月28日は沖縄をアメリカ軍の直接軍政下におくことを認めた日：サンフランシスコ講話条約と日米安全保障条約が発効した)

著者の沖縄に対する思いが論調に大きく反映しているにしろ、沖縄の「祖国復帰」が首里高等学校の甲子園出場後14年たった1972年5月15日であったことからみて、沖縄の人たちにとって、復帰がいかに長い道程であったかが伺えます。そのことから27年間におよんだ米国の占領政策が、沖縄住民に与えた悲しみは大変大きなものであることを改めて知りました。この文章を読んでいて、私はあらゆる人権問題に対する大きな罪の一つは、出発点としての「**無関心**」にあることを痛感しています。

今日の話の最後に、私は皆さん方に次のように呼びかけたいと思います。人間として生きていく上での基本原理を忘れずに、様々な人権問題に関心を持ってください。これだけ情報の豊かな社会に生きている皆さん方は、それら情報を得ることは比較的容易であろうと思います。そして、先ほどお話した沖縄の話から、人権問題に対する最大の罪は「**無関心**」にあることを知ってほしいのです。そして出来れば自分の行動を通して自分の身近に存在する人権問題、さきほどあげたたくさんある問題に取り組み意識と態度と行動力を養ってほしいと思っています。